

創作ダンスにおける「ひと流れの動き」から「ひとまとまりの表現」への つながりに関する指導法

—熟練指導者 S を対象として—

成瀬 麻美（愛知教育大学）

1. はじめに

創作ダンスは 1947 年の学習指導要領から導入され、戦前の「既成作品」から「自己の表現」を目指す創造的芸術経験に大きく転換した（松本，1992）。当時の内容は「表現技術」「作品創作」「作品鑑賞」の 3 つの柱を持っており、表現技術は現行の中学校学習指導要領では、多様なテーマから動きに変化をつけて「ひと流れの動き」で表現すること、作品創作は変化と起伏のある「ひとまとまりの表現」にして踊ることという記載に変化した（文部科学省，2017）。このように、創作ダンスは即興的にひと流れの動きで表現する活動とひとまとまりの表現にして踊る活動の大きく 2 つあり、松本（2008）は「ひと流れの動きに生命ありき」と述べているように、ひと流れの動きは舞踊の核心であり表現の本質であるといえる。また、相場（2010）は創作過程は「1 人では学習できない新しい動きやイメージが生まれる」と述べており、ひとまとまりの表現の教育的意味は大きいといえる。このように創作ダンスにおいてこの 2 つの学習活動は重要である。

しかし、吉田（2015）はひと流れの動きからひとまとまりの表現に移行する過程において、「即興表現」で出した表現を「選ぶ」「まとめる」だけで終わってしまっていると述べており、ひと流れの動きからひとまとまりの表現に移行する際の難しさを指摘している。そのため、ひと流れの動きからひとまとまりの表現へつなげるためにはどのような指導が効果的かを検討する必要がある。

以上より、本研究ではひと流れの動きからひとまとまりの表現につなげるための指導法を明らかにするために、熟練指導者 S の授業を参与観察することで有効な指導法を検討することを目的とした。

2. 研究方法

対象は A 中学校の熟練指導者 S であり、教員歴 30 年以上でダンス研究会を主催し、講習会の講師

を担当した実績がある教員である。対象授業は 1 年生の女子 14 名の創作ダンスの単元で、8 時間完了の授業である。授業内容は、1 時間目～5 時間目は新聞紙、スポーツ名場面、オノマトペ等の教材を用いた即興表現を中心としたもの、6.7 時間目は小作品づくり、8 時間目は小作品の発表であった。

研究方法は参与観察であり、授業の様子をビデオカメラ 2 台（授業全体と指導者 S を追ったもの）で撮影した。その映像から、指導者 S の指導法を明らかにするために、指導者の言動を記録・分析し、授業の展開・構成を明らかにした。そして、指導者 S の指導によって生徒の動きがどのように変化したのかを把握するために、生徒の変化した動きも分析した。さらに、毎時間の授業終わりに生徒にアンケート調査を実施し、生徒がどのようなイメージで動いたかを把握し、考察の手がかりとした。

また、指導者がひと流れの動きとひとまとまりの表現をどのように定義しどのような意図のもと授業を実施しているのかをインタビュー調査し、考察の補足とした。

3. 結果及び考察

1) 指導者 S の「ひと流れの動き」と「ひとまとまりの表現」の定義

指導者 S のインタビューから、ひと流れの動きは、「体のくずしやリズムのくずしをいれた連続した動きであり、即興的に動き、動きの引き出しになるようなもの」であり、ひとまとまりの表現は「3～4 人くらい的人数で即興で出てきた動きに構成を考え『なか』にクライマックスがあり、いい動きを何回もやるもの」であると述べていた。本研究ではこの指導者 S が捉えている「ひと流れの動き」と「ひとまとまりの動き」の内容をそれぞれの定義とした。

2) 熟練指導者 S が実施した授業の特徴

指導者 S が実施した単元の授業構成は表 1 の通

りである。1時間完了型の授業であり、1時間目～5時間目までは各教材から即興的な動きをし、授業の最後に5～10分くらいの創作時間を設けひと流れの動きをまとめ、互いに見合う活動を毎時間行っていた。このように指導者Sの授業構成の特徴として、授業の毎時間に「踊る」「創る」「見る」活動が入っていることが挙げられる。

1時間目～5時間目のひと流れの動きの創作の際に指導者Sが行った指導について、1時間目では「はじめとおわりをつけよう」という指導者Sの簡単な指示のみで、生徒の動きも単に静止した動きであった。2時間目では、「ここで終わりですよとわかるように」という指導者Sのおわりに意味を持たせるような指導があり、スポーツの勝敗が表現されているような生徒の動きが現れていた。3時間目では、指導者Sはタイトルをつけるように指示し、感じのある動きを引き出すことを重視し、生徒の動きも徐々に意味がある動きに変化していた。4・5時間目では、観ている人に伝えることと、「なか」を意識させることにより、ひと流れの動きに展開が表れ、生徒が思考しながら創っていることがわかった。6・7時間目では、特に「なか」の展開を工夫させるようにし、それぞれのグループの個性を引き出していた。

このように1～5時間目を通して、ひと流れの動きを創る際の指導者Sの指導が変化しており、生徒の動きが徐々に意味をもつようになり動きの展開が現れていた。単元前半でひと流れの動きの質を高めていくことにより、単元後半の「はじめ・なか・おわり」のひとまとまりの表現につなげやすくしていたと考えられる。

表1 単元の授業構成

	1	2	3	4	5	6	7	8
活動内容	ダンスの授業説明	ウォーミングアップ(即興)				ひとまとまりの表現を高める	ひとまとまりの表現を高める	ひとまとまりの表現を高める
	ウォーミングアップ(即興)	ひと流れの動き	スポーツ名場面	オノマトペ	見立ての世界			
	ひと流れの動き(使った)	新聞紙を使ったひと流れの動き	ひと流れの動き	ひと流れの動き	音楽を手掛かり	ひとまとまりの表現(創作)	ひとまとまりの表現(創作)	ひとまとまりの表現(創作)
	ひと流れの動き(創作)	ひと流れの動き(創作)				はじめ・なか・おわり	1, 5限のテーマから	発表会
	見せ合い						合い見せ手直し	発表会コメント

3) 指導者Sの言葉かけの特徴

指導者Sが生徒に対して発していた言葉かけとして、「せっかく自由なのにお揃いになったら残念」

「落ち葉って重い？軽い？」(1時間目)、「身体どうだった？このくずし意識して」(4時間目)という発言があった。これらは全て即興的なひと流れの動きの際の発言であり、動きの多様性、動きの質感、変化のある動きの連続性を意識させていると考えられる。ダイナミックな動きを引き出すだけではなく、動きとイメージをかけあわせ表現する身体を育成することに重きを置いていることがわかった。また、生徒が創作している際に発した言葉かけとして、「どうしたら大切なものって伝わる？」(4時間目)、「緊張感とか追い立てられるような感じ出てる？」、「渦あった？円にしか見えないよ」(7時間目)等があり、生徒の動きに応じて感じのある動きの質を高めていく問いかけが多く、生徒に思考する機会を与えていたと考えられる。

4. まとめ

本研究では、ひと流れの動きからひとまとまりへの表現へつなげるための有効的な指導法として、以下の点が明らかになった。

- ・「踊る」「創る」「見る」活動を毎時間入れること
- ・即興的な動きを引き出す際に、身体・リズム・空間のくずしを常に意識させ、動きの多様性、動きの誇張、動きの質感に重点を置きながら、動きとイメージとかけ合わせることを重視していたこと
- ・創作する時間を毎時間設け「ひと流れの動き」の質を高め、徐々に生徒に意図を持たせたり、感じが伝わるように変化させていたこと
- ・「問いかけ」の指導言語が多く、生徒が常に思考する機会を与えていたこと

引用文献

相場了(2010) 今を生きる子どもたち. アイオーエム.
 松本千代栄(2008) 松本千代栄撰集1 舞踊論叢. 明治図書.
 松本千代栄(1992) ダンスの教育学1. 徳間書店.
 文部科学省(2017) 中学校学習指導要領解説 保健体育編. 東山書房.
 吉田明子(2015) 教員養成課程におけるダンス学習内容について(1)ーアレンジの工夫 4象限の左回りルーパー. 日本大学文理学部人文科学研究 研究所研究紀要, 90:95-112.